

令和5年度 特色ある教育・経営の取組みを行う私立学校の事例集

## SDGs 学際専攻の開設

### ワンキャンパスを生かした多様な学び

学校法人中部大学  
中部大学

中部大学

中部大学は、名古屋市の北東、濃尾平野を望む愛知県春日井市の丘陵地帯に、自然環境と先進的な研究教育施設が調和する広大なキャンパスを設置しています。



中部大学 春日井キャンパス

同大学は、昭和13（1938）年に三浦幸平氏により創立された「名古屋第一工学校」を母体に、昭和39（1964）年、工学の単科大学「中部工業大学」として開学しました。その後、昭和59（1984）年、経営情報学部、国際関係学部の新設を機に現在の「中部大学」に改称されました。

「不言実行、あてになる人間」を建学の精神として、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人材の育成に

力を注いでいます。

令和5（2023）年現在、8学部27学科及び大学院6研究科20専攻を擁する総合大学へと発展し、ワンキャンパスの特性を生かした幅広い学びを実現しています。

### 【ESDからSDGsへ】

同大学は、平成19（2007）年に国連大学が進めるESD（持続可能な開発（発展）のための教育）の地域拠点に認定を受けたことを契機に、国際ESDセンターを設立。地域の他大学や行政機関などと中部ESD拠点協議会を発足させ、活動に取り組んできました。その後、平成27（2015）年に国連でSDGs（持続可能な開発目標）が採択されたことに伴い、同センターの名称を令和元（2019）年に現在の国際ESD・SDGsセンターに改称し、これまでのESDの取組をさらに発展させ、学生の活動支援及び地域との連携活動を行っています。

令和4（2022）年度に開設した「SDGs学際専攻」は、多様な学びへの理解から、持続可能な社会の実践を目指す、全学共通の教育プログラムです。

### 【「SDGs学際専攻」開設の経緯】

当時、前執行部の体制下で、人文学部の学科改組の構想がありました。その過程で、SDGsを軸とした学科開設の声が挙がったことを契機に、人文学部だけではなく、全学的な取り組みとした方がよいのではないかと、との議論がなされ、新たな教育プログラムを創設する方向へと転換が図られました。

折しも、教務部でも「分野型」副専攻から「テーマ型」副専攻への転換が議論されており、副専攻のひとつにSDGsを取り入れる案が挙がっていました。同大学では、特定の科目から16単位以上履修した場合に副専攻を認定しますが、必要単位数の多さから、希望する学生が少ないことが課題となっていました。そのような中、全学的なSDGs教育が検討されていることを受け、構想を一本化することになりました。

こうして、令和3（2021）年度に全学的な共通教育を統括する「人間力創成教育院」のメンバーが主導して教育プログラムを立案することとなり、その際に「他学部の特長ある科目を履修させたい」というプログラムの狙いが示されました。

まず、自学科SDGs科目を8単位、全学共通SDGs科目を8単位、そして他学部SDGs科目を4単位修得した学生に対して、学長認定資格を与えるというプログラム案を作成しました。次に、取組の実施には各学部の協力

が不可欠なため、各学部の副学部長に向けて方針案を説明する機会を設け、本プログラムへの参加と協力の可否について、学部としての見解を求めました。その結果、賛同の意向を示したのは7学部のうち3学部でした。その他の学部は、個々の教員は趣旨を理解し興味はあるとの反応でしたが、学部の判断となると反応は芳しくありませんでした。理由のひとつとして、資格系の学部においては、主専攻の履修で手一杯との意見があり、全学部が揃って導入することは難しい状況でした。

全学部の一斉導入にあたっては課題が山積しており、理想を追い求めていては、いつまで経ってもスタートがでないことから、「できることからやる」という基本姿勢の下で、まずは協力の意向を示した3学部で先行して導入し、他の学部は翌年度の導入を念頭に開設することとしました。

プログラムの具体的な内容は、人間力創成教育院のメンバーと3学部の副学部長、教務部長、同部長補佐、地域連携センター長、および教務担当部署の職員が、2週間に1回の頻度で約3か月間にわたり教職協働で協議しました。「SDGs教育とは何か」、「座学だけではなく活動も取り入れるべき」といった議論を繰り返し行った結果、この場面でも「できることからやる」の精神で、まずは座学のみでスタートすることを決断しました。

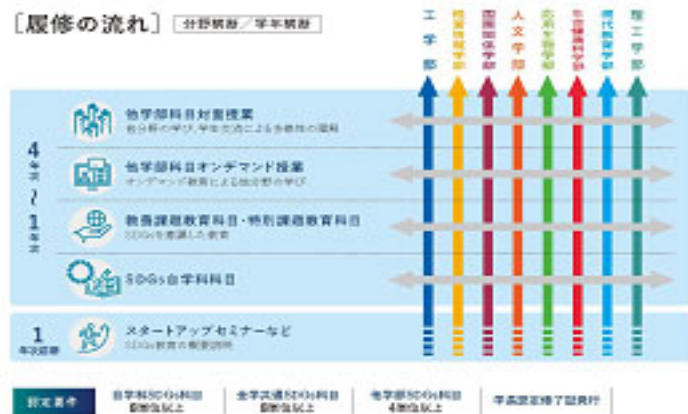
そして、令和4(2022)年度、3学部(2~4年生のうち、およそ1割にあたる559名が「SDGs学際専攻」に登録し、新たな教育プログラムがスタートしました。

【自らの成長を実感できる仕組み】

プログラムを実施する上での課題は、自学科の専門に合わせた時間割の中で、他学部のSDGs指定科目を受講する困難さでした。そこで、受講時間の自由度が高いオンデマンド授業を準備しました。オンデマンド授業は顔が見えないため学生同士の交流が難しいと懸念する声もありましたが、時間の制約が解消されたという点では、導入は正しい判断であったと捉えています。学生も教職員もコロナ禍を経験し、オンデマンドに対する抵抗が全くなかったことも導入の決定に大きく影響しました。本プログラムは分野横断、学年縦断の学びを得ることができます。分野を超えて課題を解決する応用力を養うには、その基盤となる多様な知識を得ることが必要となります。

学生は4年生修了時に成果報告書を提出し、修了認定部会で認定されると、学長名のSDGs学際専攻修了証が授与されます。社会に対して同大学のSDGsの取組を公表するにあたっては、学生が就職活動等の場で、どのようなことに取り組んだのかを問われた際に、きちんと答えられるようにする必

要がありました。重要なのは「学生が自らの成長を実感することです。そのため、報告書は、学生自身の言葉で何を学んだかを書くことを条件としました。」



履修の流れ

【学生からの反響】  
 学生には、毎学期アンケートを実施しており、理系の学生が文系の科目を文系の学生が理系の科目を履修することと「自学部の中では学べなかったことが学べている」といった前向きなコメントが届いています。履修には事前申請が必要のため、何を学びたいのかという明確な目的意識を持った学生が多いと感じています。

【ワンキャンパスの強みを生かして】  
 本プログラムの開設にあたっては、ワンキャンパスの総合大学であることが大きく影響しました。

工学部都市建設工学科教授・人間力創成教育院長補佐の武田誠氏は、「ワンキャンパスの環境で、教職員が互いを熟知しており、忌憚のない意見を交わし、協調できる関係性が構築されていたことが大きかった」と話します。

また、副学長・人間力創成教育院長の佐野充氏は「複数の学部や学科が集約されている総合大学としての環境が、分野横断、学年縦断といったSDGsの多様な学びの実現を可能にし、文理融合のワンキャンパスという特性が実質的なものとなった」と捉えています。

同大学では、SDGsは単に目指すべき目標ではなく、社会の行く末を見定める指標であり、学生にはSDGs教育を通して、そうした時流を読む力を培ってほしいと考えています。

SDGs教育には正解がありません。プログラムの開設から2年。全学部での導入は本年度から始まったばかりで、これから中身を実質化していく段階です。プログラムを運営していく過程で、SDGs教育が進化していくことがあるべき姿なのではないかと考えています。

学生教育部次長の出口良太氏は、「SDGsの17のゴールに関する内容は、それぞれの学科の中で学ぶことはできる。あえて学科の枠から出している大きな理由は、ワンキャンパスの中で、学生が卒業までに自学部とは異なる思考プロセスを体験し、より多くの発想の切り口を学ぶことで世界が広がる。そういったことができれば良い」と話し、今後は、プログラムを形骸化させないために議論を進めていくことが必要と考えています。

取材を終えて、  
 「専門以外の分野を知ること、世界が広がる」との談話から、学生がSDGsについて知るだけでなく、社会で実践する力を身につけることが大切であると感じました。

ワンキャンパスの総合大学であることの利点が大いに活かされた学びの場は、学生にとって多様な学びと可能性に溢れた魅力的な環境なのではないでしょうか。